

## -地道で野蛮な試み

私は制作を通し、「気付く」という行為を上演しています。この時のトピックは「人は、記号や、ものや出来事を観察し徐々に要領を得て、身勝手な規約を獲得していく」です。

私は幼少時、学習塾でひたすら数学の計算問題を解いていました。そこは教師が授業することではなく、生徒が1人で問題用紙に載っている例題を観察し、見よう見まねでひたすら数式を動かしていきます。教師は最後の回答が正しいかどうかのみを採点します。生徒ごとに教材が進んでいくため、小学生で微分積分を解く生徒もいました。しかし私が思うに、厳密にはそれは微分積分を解答するとは違う能力でした。むしろ微分積分の体系は後の学校の授業で理解していきます。

ここでは体系の理解を離れて、数式との実践のみによって機能が獲得されていきます。本質的な理論の理解を経由していない計算過程は、一見普遍的な様相であっても、解答者の頭の中は支離滅裂なロジックが働いていることがあるはずです。

私は理論の理解を経由しない機能の発生に興味があります。数学以外となると、何をもって機能が起きているのかの判断は難しいですが、私が幼少期に経験した機能とは、機能だったのか？それ以外だったのか？「気付きの上演」とは、実践の中で、人が眼前の情報から独りよがりにも得られる機能と規約、転じて起こり得る意味と出来事を待つ、地道で野蛮な試みです。

2023.07